The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Writing under Influences : A Study of Christopher Marlowe
Author(s)	Yamada, Yuzo
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3143705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	山　田　雄　三（やま　だ　ゆう　ぞう）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　13591　号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科英文学専攻
学　位　論　文　名	Writing under Influences : A Study of Christopher Marlowe
論文審査委員	（主査） 教　授　藤井　治彦 （副査） 教　授　石田　　久　　助教授　玉井　　暲　　助教授　森岡　裕一

論文内容の要旨

本論文は，イギリス16世紀の劇作家・詩人クリストファー・マーロウについての作家論であり，彼が同時代の政治・思想・文化の影響の下にいかに自己を形成したかを，新歴史主義とハロルド・ブルームの影響論の方法によって論じたものである。論文は英文で書かれ，236ページからなる。

第1章ではマーロウのルカヌス『パルサリア』の翻訳における誤訳の意義を論じる。マーロウはこの翻訳にあたって，サルピシウスの注釈に依存し，時には無批判なまでの借用を行なっているが，同時にマーロウの翻訳には原典のテキストからも，注からも著しく逸脱した部分がある。論者はその逸脱に注目し，それらの逸脱を促した力をマーロウの時代の中に求め，マーロウは当時のイングランドと，スペインを中心とするカトリック勢力との抗争を原詩に描かれたローマの内乱と重ねあわせていると論じた。

第2章では主として『タンバレイン』に見られるエンブレム集の影響を論じる。『タンバレイン』は様々な意味が疑縮された舞台画（ステージ・タブロー）の導入によって大きな成功を収めた。この技法の生まれた源泉は，当時流行し始めていたエンブレム集であった。論者はこの戯曲が成功した一因はマーロウがエンブレムという影響の源泉を隠蔽しつつ，それを舞台に転用したところに見出されるとする。

第3章では『フォースタス博士』におけるジョルダーノ・ブルーノの問題を扱う。この劇にはA，B二つのテキストが存在している。マーロウの筆になると考えられるAテキストにはブルーノその人は現われないが，ブルーノの思想の影響を発見することができ，マーロウのこの異端的な思想家に対する両義的な態度を読み取ることができる。これに対して，Bテキスト中のマーロウ以外の作者の手になると思われる部分には「サクソンのブルーノ」という人物が登場するが，その姿は異端的ではなく，体制側の容認できる姿になっている。論者はこの変化をマーロウが影響の源泉を危険と思われるほどに顕在化させていることによって生じた現象と解釈する。

第4章は『マルタ島のユダヤ人』のマキアヴェリズムの問題を扱う。この劇においてマーロウが描いたマキアヴェリズムは故意に歪められたものである。論者は，この歪曲はテューダー王朝の神格化を望む体制側が，マキアヴェッリの思想の普及によって権力の実態が理解されることを好んでいないことを意識して，マーロウがこの思想家の国家観を隠したためであると論じる。

第5章は『パリの虐殺』におけるラムスを論じる。この劇でラムスはユグノー派の新論理学者としてアリストテレス派のギーズと論争し，最終的には処刑される。なぜマーロウは劇全体の構成上の破綻の危険を冒してまでこの衒学

的な論争を劇に組み込んだのかという問題について，論者は，マーロウはラムスに強い関心を持つ知識人のサークルの中にあって，この学者への態度を劇の中で示さざるを得ぬ立場にあったと考え，ラムスに共感を抱きながら，学者もまた権力闘争に組み込まれて，犠牲者となりうることを示したと考える。

論文審査の結果の要旨

この論文において評価すべき点は第一に着想の鋭さにあると言えよう。論者は作品が作者の創造物であるとともに，文化の構成物であることを重視する，新歴史主義的な立場を取る。同時に論者は影響を先行する作家からの恵みと考えず，後続の作家を支配しようとする重荷と考えて，「影響の不安」の存在を説くハロルド・ブルームの心理的な影響論を用いて，マーロウへの影響を論じている。すなわち，この論文は新歴史主義とブルームの批評理論を相互に修正しつつ，統合しようとする新鮮な試みである。個別の作品を論じるに当たって，論者は作品の，一見，周辺的な部分に着眼し，その検討から出発して作者の核心に迫る意味を発見する方法を用いた。この方法によって，マーロウの作品に働く当時の政治権力，文化的流行，あるいは最新の思想家たちが知識人に及ぼした影響などの動態について，いくつかの側面が明らかとなったのは，この論文の最大の功績である。さらにこの論文は，全体として，従来の文学史においては，体制への反逆者，無限の力にあこがれるルネサンス人，壮大な詩風の創始者などと見られていたマーロウを権力の錯綜する現実の社会に，不安を抱きつつ，自分の場所を求め，変化する状況に対応し続けた知識人という新しい姿に描く試案を提出した。

このように，この論文は新しいマーロウ像を探った優れた論文であるが，問題点もないわけではない。ブルームの理論に依りながら，その理論において重要な意味を持つ，心理的な「父」の性格が明瞭でない点は，なお一層の説明を必要とするであろう。各章はそれぞれに優れた論考となっているが，いくらか論文全体としてのまとまりに欠ける印象を与える。英文は最新の批評の語彙を用いて知的な鋭さを持つ文体を目指しているが，ときとして言葉が足らず，意味が分かりにくくなっていることを惜しむ。しかし，これらの欠点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。

以上の結果に基づき，本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。